

公益社団法人いわき青年会議所 2016年度 理事長総括

2016年度基本方針に沿って総括する。

【たくましい運動を支える秩序ある組織運営】

まず、予定者段階で2016年度の組織構築に通常よりも約1ヶ月半の遅れを生じたことにより、各室への運動方針の理解、短期間での委員会の事業計画の策定を強いてしまい、予算・事業が全体的に脆弱な計画となってしまった。その結果、いざ計画を企画・立案・遂行する段階で、方針との乖離が生じてしまう事態が散見された。また、副理事長に室に固執することなく全体を俯瞰してみるよう、当初担当室を持たせなかったことや本来会の方向性について戦略的に意思決定を図るべき三役会で、本来すべき議論が十分になされなかったことも組織として反省すべき点である。再度、各会議、各役職の役割を明確に意識しながら活動することと、副理事長・常任理事・委員長との縦の連携をより強固にする必要がある。

財政・規則特別会議や法人格維持特別室には、委員長ではなく、副委員長・会計幹事を据えた。各委員会差はあったものの、委員長だけが議案等を抱えることを回避するだけでなく、スタッフの人財育成の部分においても効果的であった。また、本年は、年間フレームや予算の変更が多く見られたが、事務局・財政局が細かく対応していた。事務方は、法人の要であり、委員会の良きアドバイザーであることを行動で示してくれた。事務局・財政局を担う今後の人財育成も急務である。

例会や各種会議の設営・運営等は、総務委員会と事務局・財政局により、着実に行われていた。セレモニーのマニュアル化に取り組んだことも、厳格なセレモニーを実現するための第一歩である。次年度以降は、しっかり共有化を図り、LOMメンバー全体に波及させてほしい。

対外広報も粛々と情報を発信することができた。ホームページ・SNSの活用による情報発信についても定着し、メディアとの連携も図れるようになったと思う。今後は情報の受信者を意識した発信や広報時期等の工夫が求められる。また、事業広報でのFAX番号の誤植があったが、それを機にリスク・コンプライアンスチェック機能の強化を図った。失敗を失敗のままに終わらせないことが大事である。今後も細心の注意を払い、チェック機能を果たして欲しい。対内広報においては、スケジュールを週一回会員のメーリングリストに流したり、例会のCMを作成したりと、新たな試みが行われており、それが出席率等に及ぼす影響は、今後検証していく必要がある。

【文化・特性を活かした戦略的な地域経営によるいわきの再興】

フラガールズ甲子園から離れた初年度で、今年度の「フラ」をまちに活かす取り組みは

大変難しく、これから先の我々の運動を左右する大事な一年であった。行政・各種まちづくり団体との連携を図り、市制施行 50 周年という好機を活かし、いわきの文化「フラ」を市内外に発信した事業を展開した。また、「フラ」をいわきのソーシャルストックとして全国へ発信できるように官民連携を強め、ビジョン策定会議を立ち上げた。事業・政策の両輪を回すことで、「フラ」をまちづくりに活かす視点に良い形でシフトした一年であった。次年度以降の事業・政策展開に大いに期待したい。

また、震災 5 年目を迎えて「共生」の取り組みも重要な局面を迎えている。5 年目を機にもう一度共生の趣旨を広く発信するために、3 月に復興祈念点灯を行った。そこで集めたアンケートを元に、昨年度のイルミネーション事業をさらにブラッシュアップして事業を展開した。特に、いままで以上に 3LOM が協力体制を構築できたことや、いわき市民と双葉郡の方々との交流を創出するワークショップ事業の展開は、事業を良い形で一歩前進させたと思う。一方で、いわき市と双葉郡に関する共生や広域連携について、政策的な話し合いや取り組みが欠けていたと言わざるを得ない。次年度以降、H29 年 4 月富岡町の帰還開始(予定)をはじめ、いわき市や双葉郡の状況の変化をきちんと分析した上で事業・政策展開が必要である。

【心が通う J C 運動による未来社会への貢献】

地域を牽引する安心・安全なみらいづくりを推進するために、対内外に対して防災・減災に関する取り組みをしてきた。東日本大震災を振り返り、JC が何をしたのか、今後災害が起きたら何をすべきなのか、震災後の入会が 7 割以上の現会員と一時的な共有は図れた。奇しくも熊本地震をはじめ、多くの災害が起こった年であったが、その際の会員の言動や行動を見ていると防災・減災の意識はまだまだ低いと言わざるを得ない。まずは、市民意識の向上や社協との連携の前に、我々がやるべきことやってきたことを理解し、災害組織図や TADS-NET をきちんと知り運用することから始めるべきである。

医療問題改善に向けての取り組みは、医療を受ける側の意識改革のため、健康増進に関する事業を展開した。市民が取り組みやすいアプローチをしていく方向性は良かったが、事業の組み立て、広報等に課題を残す結果となった。2008 年より取り組んでいる医療問題であるが、我々が取り組む問題として妥当なのか、社会情勢が変わり、JC が取り組むべき地域の問題は何なのか、いま一度根本的に調査・研究する必要がある。

みらいを担う子どもたちの郷土愛を育むために、いわきの魅力を子どもたちに学んでもらう事業を展開しました。回数を重ねることで事業の改善を計り、子どもたちがただ楽しいものではなく、我々が子どもたちに残したい地域の魅力を伝えられた良い機会になった。子どもたちの郷土愛は、一朝一夕で育めるものではなく、長期的な検証を必要とし、事業の検証も難しいものである。子どもたちと多くの時間を過ごす親や学校教育の影響が計り知れないことを心に据え、次年度以降も事業を展開していただきたい。

また、本年は公職選挙法一部改正に伴い、選挙の仕組み等主権者教育を公開例会で取り

上げた。先駆的な取り組みではあったが、開催時期や年間通じての運動の推進を計画段階より熟考していれば、もっと効果的な運動を展開できたと思う。

【地域を牽引する意気あふれる人財の育成】

例会委員会を設置した背景には、例会を成長の機会として、会員が価値を感じ、能動的に活用してほしいという願いと、例年各委員会が本来注力すべきことが例会を担当することにより、本来やるべきことを見失ってしまう傾向にあったため、その問題を解決することになりました。年5回という例会を活かして、各例会を結びつけ、「未来を切り開くパイオニア」を育成するという目標を掲げ、一年間を通じて、成長の機会の提供をしようと事業構築をしました。例会のあり方に一石を投じた1年間となったが、LOM全体の負担軽減がかえって例会委員会を疲弊させてしまったことは否めない。

会員拡大については、本年度25名の新入会員に入会いただきました。入会人数は例年よりも若干少ない人数ではあるが、その個々の会に参加する姿勢は目を見張るものがある。彼らがJCの価値を正しく理解し、次年度以降の活躍を大いに期待したい。新入会員の活躍が目覚しかった一方で、入会システムの検証や既存会員の掘り起こし等、具体的施策が見られなかったことは残念である。

入会のプロセスや新入会員の人財育成をどのように行うのか。来ていない会員にどのように働きかけをするのか。毎年変えるのではなく、そろそろスタンダードを構築すべきである。これは、拡大やひとづくりを担当する委員会だけではなく、三役・会員資格審議委員会と連携し、過去の検証を行い構築して欲しい。

【グランドデザインについて】

グランドデザイン検証特別室を設け、2012年度に策定された「いわきJCグランドデザイン」の検証を行った。3つの基本方針の中で特に、「産業の発展」に関する取り組みがなされておらず、また、グランドデザインの方針・方向性から逸脱した事業も散見され、グランドデザインの形骸化が進んでいると言わざるを得ない。次年度以降のグランドデザイン改定にあたっては、社会情勢・LOMの現状等をしっかり捉え、理事長所信の上位概念に位置づけられる一本の大きな軸として機能させて欲しい。

【最後に】

スローガン 「悉く、わが師たらざるものはなし—心が変われば、行動も変わる—」
「いわき」や「市民」のため、理想や目標を大きく掲げ、大きな夢を描くことは素晴らしいことだが、一方で、我々は無責任に夢を語ってはいけない。この言葉には2つの意味があり、「明確な目標を提示できない絵空事を言うてはいけない」という意味と「口に出したことは、必ずできるように努力工夫を怠ってはいけない」という意味である。
今年も与えられた役割を担い、さまざまな目標を追いかけてきた。やっているときは必死

だけれども、振り返ってみれば努力工夫は確実に自分の力となり、世界が広がっていく。一年前にはなかった景色・世界観が一人ひとりそれぞれに今はある。一年経って、一年前と同じ世界観だと「自分は成長できていない」ということである。一年前には想像できない自分が一年後にいるからこそ、次の一年を期待しワクワクしながら迎えることができる。我々は何のためにJCをやっているのか。

一年一年未知の自分に出会うためだと私は思う。そして、その一人ひとりがリーダーとして成長し、その成長した個々の強みを生かして地域やその地域を担う子どもたちに還元していく。そんな人財をこの地域に多く残していくことこそが、我々が理想とする社会づくりになるのではないか。JCの運動はその時代背景によって取り組むべきものが変化するの当たり前である。常に時代の変化を捉え、分析し、いま何が必要なのか、問題意識を持ち、行動することが大切である。しかし、JCは地域に必要とされる人財を育成する学び舎としての役割は何一つ変わっていない。だからこそ常に理想を高く掲げ、失敗を恐れずに考え行動し、様々なことを経験し、会員同士が互いに学び合い、成長させることが出来る「いわきJC」をつくって行かなければならない。

スローガンに込められた

「真剣に道を求めれば、師は無数に存在し、あらゆるところにヒントは隠されている。」

このことを意識して、JCに関われば一年後に想像もしていない自分と出会えるはずである。また、私自身も自分の想像していない自分に出会いたい。そういう想いでこのスローガンを掲げ、一年間活動してまいりました。

2016年としてそれぞれの運動において、小さいながらも一歩進むことが出来たと考える。しかし、全ての分野において満足のいく結果が得られたものとは言えない。これは組織作りから運営にいたるまで、理事長である自分の至らなさに起因するものであり、反省すべき事がたくさんある。今年で完結するものはないからこそ、自分自身や組織を見つめ直し、出来た部分は自身の血肉に変え、至らない部分は素直な心で受け入れ、しっかり検証し引継ぎを行い、新たな組織でたくましいいわきの創造に向けて、2017年運動を一歩一歩前に進めて頂きたい。

公益社団法人いわき青年会議所 第12代理事長 遠藤 弘道